行脚文集

紀伊　大和　伊賀　河内
和泉　攝津　播摩　備前　卷
備中　備後　安藝　周防
長門　豐前　肥後

三

へ 5
2873
3

2873
3

日本行脚文集巻之三

貞享元子ノ春。高野山ヨリのぼる。賓坊西谷戒光院ニ法ヲ。住納不望ニより山乃記をかく。記略 [illegible]と余ニ餞別乃小序ニ一句を添ゆるうびしまゝ玉藤ニ曰。○一ハ百千乃父。二ハ第法不二門乃母なり。三ハ是吾 祖師三密加持の德風として仮ニ無不非の美名をよぶ。それ風ハ不蘊乃神魂。阿字ハ會風。かつ君子ハ德祥なり。音あまでも手にとられぬ。古来有無乃言巻ニ尽きて事なし今は無不非軒風義神我 此なにさゝに閑城の固を用ぞ。はゝ恨て

藤乃雪や花ハ[illegible]し風義 高野山西谷戒光院

○蓮華谷御菴室。開山明遍上人德行之記

阿字不生乃風ハ一念清淨乃擺我掻。[illegible]生死乃雲ハ無相本空の袍を伴ふ。いでや和朝法の主嶺。高野山の梵園ニ攀。佛

御帯殿順祥し。猶寂を云ふ乃奥院おほん廟前に蹲踞して
適ほどぬかづく。ぐかも森にまつる松杉のみどり。青漢に桂。鼎
勢鳥韻真鶴にこゝろ。雲勢悟入のよきぐまや。心肝空にうつ
れ毛孔いよぐち。しぐしは真言我とる。燒軒を退。蓮華三昧
院御菴宝明遍古徳乃淺堆を辞せんや。やがて白玉楼を
襤褸乃袖にさあつは。曲所も此上人を。先祖は藤門乃支流
通憲入道信西乃末子として。絶角のむかしより。螢雪琢磨
乃勤さらく。智徳聰敏の譽なり。しかはあまど文質かつて
名利の用とせず。唯塵世を除くぴとへに深谷深逸乃松宝に
膝我いま。抽むを象和乃仙香にかつり。密雪を宝中の宝鏡
をこがく。をのづから道心を鍛えよりかたく。行業は氷霜より
皎く。朝には三密乃行法我凝し。夕には秘密会仏乃要座を

ちなれど。二行掛てとして。豁然智度乃心さし。美窟に答へ
大師乃御内徳に契體ましまして。時に現形の薫衣に茅徳を
かつし。いともかしこし。如来附属傳に来て乃藕糸乃僧伽黎
衣に御告文乃吟声はさしくお授し給ふ。此和御生おの
奇特法終焉の瑞祥を記録にあらためなれば此ぬことさう
現住秀峯大徳納は。元数量学乃傑衣宗系の法燈として。秀
逸乃俊作。第子に巻。中にも唯識圖解。百法要解十住心論
科註等。法人耳おどろかし。目我よりこがちぬ。猶たてこそ氣
禀陰徳に。測識乃神能机拄にもたれ柔和乃眉には。八霜を
なれ。温質乃繊には一阿の風雨にして陰宝にむかひ。鎮に慈悲
乃浪七瀬の流行ありて。悲心乃嵐を八葉の月の河をはらふ
としごろを俊逸耳に経波しかぞ。ことなくもなぐらむ御乃蓋徳

蘭にをよびて彩ひ給ふ法乃志願に。密嚴佛國乃奥儀。猶そこ
一大事乃種子。隠終の事明まして益授し給ふ。今は此世乃望
呉ぬ。心にはなれ。此端をなし。と。鄙にいまぬれば。老禍もやゝに
長途に困じたらむにと。こゝにおもひとゞめ給ふにおぼえず十餘日
かさなりし。此御廟乃上に。古奇にはなれし。蘇あり
○現形さまや。業うごく塚乃蔵　佐明遍上人乃御作。一枚
法語を。法古法然上人法光山の時。雑猜におぼしく。まづから書
写して法師をしとなん。世におほく得れど。ぬまり見積かたくて記ス
○明遍上人假名法語　△古乃先徳は智行徳ゆゑ。隠終
心にまかせめでたかりき。近比は法家の人師。おほくは愛文を
学ばれども。業境を得ざる志をなし。仏法我をつゝ。世我を
たゞ檀とし。聖教をもつゝ身我貴ふ嫁とし。ちうう間平生の

秘書。併ら名利乃為なれば。檀実をあらそふほどに。光法をや
く尽て。隠終勿にを付時。何事我かきべきとて。或は念仏。或は
真言。時に臨ぐ思ひ煩ふ。我に渇にのぞみて井を握がごとし
只一大事乃生死を出へき法我平生よりく思ひたるを
画し。穴賢と　右此法語に注釈しまふく。當住秀嶽和尚。假
名法語後訓ゆゑ書物一冊編録し給ふ。予に跋をかきとなく
免給し。さほかに身此面目なれば否もやらず。小章に粗言を添給し。
其跋乃詞　○志も先師二徳乃智悲海猫を慮に。一心平
等の徳海をほとりなさがゆへに墨水をうつさば。なぞう一味
なるさらむといとたふとし。漢に名利の和用を除く。徳乃の
内徳を求むへしと。是もいふとし。又漢に第法一如なれば。檀実を
浄をかつはけるなりと。是をもつゝ又まさふとし。ひとへに漢逸乃切業に

まぐり。元乃一大事を要とはなり。是我貴乃一大事なり。今は
一紙の法語に万歳をつかひ。一言の滅益に三界のなりとなり
事を於殊勝なる。先滅乃一おより起て。現御乃後訓に千里
乃大きひらきぬるまのまとふとさに。吾我ならんに隠れのあま
ま。後訓白軸乃撲し。○玄漏路へ乃通年船乃法語にて有漏路
切御乃閑そはぬる 時元禄二仲春湖山飛散人無不非軒呑空野衲書
かくに戯風我見宵したまふて。一冊乃報はいまさうびし事。
まくくの利乃糖とにいあらぎ。ひとへに弘誓船乃沸をあ
よれに事のうましさ。ひとへに出そるるや。德義もうち諾き。又
玉兎公我弛く。長編乃一巻我ゆるうびし。玄金章に
○神國之隠士無不非軒呑空友翰叟者余豫識得厥姓名矣
齡及救蟻而鑽仰挺粹也神鋒發研德熏遐蜚芻蕘之卑僕

謡其賢雉兎之匹夫唱此美論日之孺撃甕之童夫斯非之
阿孰乎遂乃炊經典憐頴達之缺正義酌詩頌褊鷗翁之堪
于偷閑吟詠之朝歌者兩聖呑於聲振逸之翰勢者三筆拱
於手加旃三千之寓言巻一日甲乙之謡曲者調两流張畧
陳奇冊婆術扁方之袂僉以漁獵者哉聽導雖多能者君子
所耻誹章之逸興者夫斯無盡藏於焉取焉捨哉奇哉呑叟
且以爲三使遮于眼二鼠不忍怖菩提之粮求無地本宅田
園將蕪嗚呼歸去來兮造而立禿頭割衣志陽國輪王礮馭
盧嶋七道五畿三百麗城神嶽瀍嶺行履去歳次昭陽大淵厭
膚寸爲衣翔震兌九老爲祛走坎離人何廋哉縣縣拔二轄
亭亭促數章疊成于巻積充于笈焉既經三三之星霜適攀
當峯憩野室累日之談話闇闇焉孜孜乎茗寒酒冷也呑叟

之痾毋止携杖巡徑書吟載袂手之彬彬口之喈喈爲酬無
物惟吐一偈云爾
清貧活道翁 呑啜一阿空 操踐彌天轍 辯超漱石風
三千戲嘯牖 六十狹行宮 軒号食油鳥 孰知八分中
于時元祿二仲春日 埜山御菴室秀翁書

寓言堂呑空叟

信にかゝれおもたゞしきゑ長編をかいてまゐらせたゆくゆくは口噤し。世人は嘗疑せんとしけ記にとゞめしをかつまたゝきゞづりし 嘗夜とめぬる聖乃抱し 秀翁弟子 尊深
くしろ。又覺 風籟は蛇柳も頭をうなられし 同 秀乗
弟達乃句下ニ 縫とめむ解脱乃笠成糸柳 同 深秀
見嘗にゐる聖鳶もまるといれかり 同 頼秀

○同谷常住光院眞切時乃一順

しばしとてしが笠成とられし柳風
うきこゝ乃 籬 掛く 雲乃 御 常住光院 心海
夕雲雀鳴紫けし落る 数少ゝ見えく 西蓮院 頼意
矢立てしよさう 篤つぢれ 摘 明石氏 山樂
書ばえに 草成 猶ぐ 月を 戸 浄光院 未深
かり寝乃 斷 少なふむし乃 書 妙泉院 夏月
脚頭到處水雲濶 六十餘州弟與兄 幾度堪吟風月意 慕哀竹杖是同行
又 竹杖をもてとばりを重むる邨 常住光院 心海
又返章乃一軸せしが畧して。又餞別に漢和成
春ー友ニ 頌ニ 圓ー 蓋ニ 御菴室 秀翁
賢もとむ 宣乃 抱ぐ 書

文和漢一巻　二月や　暁　ちらさ　夢見草
せしに　別ル　春ニ　説ー法ノ　園　秀翁

文圃(カナギ)ナリ書ニ給ひしあぐさに　○香見老人に同ましも限(カギリ)
あまぐ。ぞられくまたりぬ。中くあふを悔しくて
死(シデ)ぬ乃山鵑　力なくば中くにとの名ぬを老ぬらめやも　秀翁
在し
中くに家を見ぬ世乃様なるばかくおてふ事はあらしを
○年とわて　死梅乃俗法の師や　三　鈷の雲
尚ふりて　秘密翅(ヒミツ)かごぬを大師よぶことり
いひ様乃句
○奥流よく　奥流　何やら　をのぶとふことを
同聖山絶ぬとりしれら移る木松乃嵐を自ふたりに
寄ぬかうへも拾ひきたつる嫂にこる聖は法乃油ぶことり
俗波れしくを御廚(ミヅヤ)乃橋の音信又いつかはと松の梢に目離(ガレ)がるく。

見るかへし不動坂より東へ比待えたる梅かりみよし聖に入。坂乃
并木は半蔵ゑ寄るなるぬと御乃血戦も花にさがへしを
梅かりに貞草鞋やよし野やま
宮ゆ名不ゝは年聖楽内をとりにしてみるたりれは此山乃事は一
不も記(シ)給ふに　○かくれ家乃松ぞよは還俗(ゲンゾク)たるわけり
俗家乃松とはさけと年聖山花や梅の中にこそ立
梅ゆへにことしよりも三吉野も雲さへ花の名をよぶれぬる
不明とみるまてこそはあるらめ吉聖乃山の山乃増の花
吉聖山又こゝむ花の枝わりとおりやとりん岩のしらを
しそきくよしのゝ山乃よふこそ目をじな後が葛餅を見ん
年聖川と浪多哉乃岩城に大和めくり名不れ所堂ぬ見ん給ふ
かつ大和名不集あまそれ別のまは記し給ふを此年東ちる祈(テフノク)

はつ春のはつ子の日のはつ遊び
神をひきこむ野辺の松かぜ　常縁

又松の小
千代ふへき色をしるへや松の葉の
とけはやわかぬ霜のむすひも

又祝ひ
万代をいはふ心の深ければ
霜不ㇾ降村雲ながら探題
蓬萊の松の月こそ芽出たけれ　南都竹村　俊清

又松
陰もよし枝もよろしき松の葉の
おのれ常盤の名にはかくれず

又若菜
春の野の若菜つむてふ
きのふけふ雪のふりしく
あすか川流れて早き若菜哉　左柳

又若菜
能乃勢野や信乃芳
池のもとうく　賀伊や紀乃
○東京雲井八重桜
乃松枝ふりと　桜代ろ色そ

又桜の木の松と
にたるところ
そこれもろもろ胆奢を風月
ひふろ　粧ひて　祇園
雪のふりしく野辺の桜　村井氏　道弘

○又別当
待よ尽ん兵部
摘ミ　厳ケ
ミイ味さ様なる
徐ソ　稚ワカ　を
○みちのくの
いにしへ色の神鰕カビ
ふ人ぞ
ことそうらうて
めうりあひよ
○又長谷寺の参
中合ひまいひ
こなり

○又桜の木乃松と
にたるところ
そこれもろもろ胆奢を風月
ひふろ　粧ひて　祇園
雪のふりしく野辺の桜　村井氏　道弘

○又別当
待よ尽ん兵部
摘ミ　厳ケ
ミイ味さ様なる
徐ソ　稚ワカ　を
○みちのくの
いにしへ色の神鰕カビ
ふ人ぞ
ことそうらうて
めうりあひよ
○又長谷寺の参
中合ひまいひ
こなり

○東京雲井八重桜
乃松枝ふりと　桜代ろ色そ

又若菜
能乃勢野や信乃芳
池のもとうく　賀伊や紀乃

又若菜
春の野の若菜つむてふ
きのふけふ雪のふりしく
あすか川流れて早き若菜哉　左柳

又桜
陰もよし枝もよろしき松の葉の
おのれ常盤の名にはかくれず

又祝ひ
万代をいはふ心の深ければ
霜不ㇾ降村雲ながら探題
蓬萊の松の月こそ芽出たけれ　南都竹村　俊清

又松
千代ふへき色をしるへや松の葉の
とけはやわかぬ霜のむすひも

はつ春のはつ子の日のはつ遊び
神をひきこむ野辺の松かぜ　常縁

伊賀上野西蓮寺西住ハ行馬乃古友なりしが其余年對面せざれば笠置窟乃ぐてゝ言寄りしとおくせうぞとしまふ。遁ぬりしそ此まゝ奈良乃席に就し。中舎阿波聖一家ゆゑ小舎記とうさゝく

圓融の目付 桂乃柳ゝ郎

勅ゆゑ一念三千の東風 伊州阿波野本願寺 源雄

明我告る常小誘引せられ西葉小はく上人言ふこハ愛しゆゑむりしと語り。書院乃壹眺をやくと進まふよりあへず

○伊州上野長田庄百田村醫王山西蓮寺眺望并八景吟

一空賤所命而假物之稟所者性也。命性之中万物之太本而天地之間亭こたりゝ言寄ある事と物ゆゑに配とうに此中道乃離まる物ハあらず。是一向席大圓滿撰竪自在乃法極るれば也。いでや台嶺圓融乃金獅子を勅ずして。十界の法衢にうけ西蓮此親乃玉鳳凰を奉ゆゑして十如乃心園に吟ずとのづから無上亦無三の一挺蠟。一をつく貴自掛の流燒なれば也。志うれば西山西蓮の滑脇を。家門畏聖主。後去御門御戒師圓戒國師真盛大上人乃開基としてこうから秘修し。五方小神咒を埋。四隈に曼荼羅をしき。阿耨多羅三藐三菩提乃佛をもち。出離解脫乃眞加あらせ給へと物したまふこと。法洞統長の地を拵ゆゑ。昊祐乃聖祐なり。されば御在世乃講筵ハ三時通月乃眶鮮ハ五智達蓮乃吉香ゝ。妙法一味の六字名号乃慈雨をふらせ。性生直入門ひらきしより。德化連綿として時日の梵鈴とに編まふ乃あぐ夏をゆゑ。喜窮乃魂形碑銘に述べ。金圓巍ゝとして居生がごとし御入滅の奇相呉瑞ハ韓にいつせがくし。只ハ豈を松ひとり聖流

来迎乃法筐のおくをとくのおもて形乃垂せ給ふ御自輪をそ〳〵め座信忠ゞ十王の恩恭ゞ釋迦牟尼乃仏舎利ゞ深い世よさうるさ貴ぬるりさんぜ物ごとの変化の世にうれそ発さり。敏免ごり。拳乃瓦を屋をとをべく班猶乃塀やたち鶏潔ハ膝乃せく蘚木の巣とたりぬ松區宮く葉耳酸漿乃茎濡よ虫ゞ乎そうり又拳ゞおくこむろ祢つう。高祖再世の絢緒やそくん當倍龍大僧郷大阿闍梨真雅上人中興として活神乃玉源よやつ〳〵。屋池空山を承地谷乃据乃功なり。宇瓊南雁ゞ癖ゞ癖ゞ。四拈みそびハ堂乃拳乃琴を贈せうい。よそ瓊帥智約良圖の胸襟庵く。溜織拾ゞの衣裏かやさうれゞ。八生ゞ素園肩とひ〳〵さゞ軒乃壇被猶祢つ〳〵。人塵拂ゞ深感涙私雨をそそぐりゞとそ〳〵棟ゞ乃風そ。四顧茫然として扞元来山

地ゞ心乃ゞ霧よ降ゞ天晴西湖ゞ百里七尾周一吸乃盡よたりゞ須臾万頃旬ゞ芥子一容にうゆ〳〵やゞく八景八旬を吟べ〳〵ゞそそぐおまそうゞ幸ちるれ。山頭をゞ迎て月約ゞ三ゞ周リ緑野風かろれそ塊ゞ芸作ゞ戯まて〳〵。

要ニ八景之品定并ニ八吟有長略　同涼雲亭一題ヲ記ス

○かくて行垣櫻塘乃おそいくよの塵の詰ゞ雪甲乃芭蕉ゞ洗眼ゞ四季ゞ乃杜若ゞあくハ泥ゞ白ゞふ洗ゞ白ゞ乃光明ゞ屈原風の柳ゞをあくいあくゞ巌ゞ乃ゞ蕨ゞ乃ゞふ鼻紙ゞ乃ゞ猫柳ゞそ。白夷流乃ゞ泉に伸ゞ不合ゞもそくぬいくうりひくりゞ山乃當信ゞ一ゞ乃涼ゞ亭ゞこれうん衣裾ゞ親篇乃ゞ除ゞ力にゞ園頭乃ゞこゞ除ゞく。助老童ゞ祢いざるゞ飛蝶の柠ゞをねぐりてゞ禿筆侍者ゞを懐ゞこ。襦被掌ゞをゞ乃懇ゞをけくうんとゞ。ゞ好ゞみれゞくゞ花ゞ乃遊樂の窗ゞよ。面ゞ萬ゞ乃ゞ嘯ゞく招招ゞ誌ゞをゞそ。風月擾延乃ゞない入ゞは花ゞを招ゞく。ゞ吟ゞよ裏笛ゞをゞく。

縛手乃隠子口よハ来小僧。炉鼎ハ言孫月を涌し。雑流牽乃
先意奴僕ハ拮棉小ゑあり堂ハ扨まれあり囲ハ瓢器風を
よぐひ。憲ハ藜杖雨ハまゝほく向上ハ瓢鎗乃ならハぬ行道をし。
拝雀ハよまぬ隆雄を嘆ゑあらさほしひかなかゝる所ハ密居
をしあらく。利慾乃緡を風ハ沸にゝ名望乃鎗ハ解ハ鋭襖ハ
縦ハ朝ハ藁の蕊ハ頸曳し。夕ハ浮蹉と脛押をしてあそ
ぶん。弟眺須臾ハ変ゞ。百年眼裏ハちぐむ。かつ扁鵲乃心ハ退
ておもふ石動生丸乃山ハ。山ハ心ハくるし。色心実相の月ハ月ハて
白し。起念三有の風光とも小。世ハ為一心乃福田より出されハ海去
来。初秋乃行事ハとそさに。下略

妙なるし御法乃種ハしるしまや苔をさ松にむらさ紀乃を

貞享歳旅著雍執徐寤中澣無不非軒一念堂三千風

住僧を思ふ。ひとく餞別をむすぶ

言てり春よりも狂想しさハ心ハ花乃夏ハ雨ハ　伊州西蓮寺　真能

返し

しゐてたしむ春ハんにとまるともかひなき物を花の衣く

此孫生ハ席なしく。笠置乃窟ハ刀めぐり。志ハ坂ハ就て生駒山くらがり
峠をくらる。中比大坂乃富豪と称ハ人乃ゝ所ハ川内乃久寶ハ
住ハ同侍しまゝ。ひめづらしとゝ。ほづから仮匙とりて容むしとしれどや

面をふるとも笠ハかくし法様ハ　川内久宝寺　今村　西七

貸衣厚く事ハ姫ハ火

人ハ行柿乃挨拶乃句一巻せしを　まゝ。まゝとも乃ハ鶯ハ跡をさらしぬ　同吉内氏　改家

東三まで　東雀乃床をかゝ無ハ鶯乃間　三千風

春面の詞追ふ月ハ氣ハ成れ　改家子息　机旦

○以安亭額

笠花ハ学ハんぞ風雅ハ生駒ハつるぞ石頭ハ

泉はしまて素麗に葛城を望む。此亭至大西氏元陳袂大夫の林下の
豁質ありて。心圓に花木乃ゑ我奪ひ胸襟に風月乃涼を懷く。
みづから以安亭に嘯き。漢の倭乃たくゝにまゝあらでさゞやかなれ
時光をさゝゝ三品石乃ひさゝより泉瀧を落し。岩虎を苔れ毛を
うつまゝ。銅竜水煙を吐ごろ〳〵水に蛇鳴まゝ。撫くれ柳まゝ胡
蝶に獨をうしてとう。滅に寸土大虛乃さし圖にかなひ硯に鯤魚
鯆をかへし。楮乃搖に大鵬翰て。小大不二の眺に免でく

瀧の泉を手玉にかなぐ蛙の那
虎来て風鈴より艶て生駒に奈
あるしも後別に
淑ぶこさ我む手銅乃小鮎大和川　大西氏　元陳
茅さへ光て悅のまゝれ乃那　吉内氏　机且

○人に大和川乃悅
まゝくぶをれしてて
さらそ〳〵の時を
中に美人の

柳乃眉我をうひ泣しを

絵にはれて見てや屋をなんとひひし山陰に笠乃端のかゝるくなぐれに。
なく〳〵大井乃里にいゝ。人にうちつまゝ乃明まれ社に詣むかし乃
来田を守。みつ木穂樹の実なれど餓かへさに仲哀帝の陵蒜井をを
見てゆりしが大井村乃富王氏神なれを道明寺天神乃記をれぞ
まれしに長編なれを略せ。其後端乃序文ばかりを。
○由所も神道者天極自然至誠より出て。方圓の一名。天日讓國
日禪之神魂乾坤乃大本として。靈德萬品に明こ。あくに川内
志記那出御乃里に鎮し給ふ。天滿神舍乃むかし菅相公れおはん
姨宮兄妻禪尼淨剃に閑居し給ふ。此適迂の便路として辞なふに。
尼公いこゞうの袂を悲しこ給ふをんうく。こゞから鏡盤を刻をうせ
給ふ　下略　梅飛し出師を清し木穂樹
○餞別に　時しもあまたさへ人さへ引き之慕ふんに吾をもうるおく　宿川内大井村辻氏　意宣

ゑし　引かれり春はむかしの春にして花よのこゝろはなかりけり
同意宣子息。桂琴童袂。琴にあやしくかなる我麿ぶしく
○琴ノ行　天の清明我はぐに。其質稟たる事の ひとしかるねも
自然なれぞ。又独聰敏なるもかつ天然にや。此福命にあつる人倫にて。
やごとなけれ。今此種琴いまだ十五の春。切節いとたゞなびて射御書
數の為にさとくことさらに琴にいちはやく。春宵一刻をうらむる
御月に柳風松声宮我うつ比それとなく。さゞくまうおもぶり。窈
窕さらまうつき。捲たるをよびしく。搔手。序蚤の五ツをたゞ
ぶる爪音藻井にこゝへしかな。瓦落魚躍はさら也。春柿欄上に發
紫雀掌中に啄む。彩繒をめぐるいさら水を天滴に化し。貴妃揚
霧に暖業平横風にくつる。其髻の乱落を見て行脚通を
失ひし　爪音もさくら我深く自ひろな

るしころ長別よく語し偈に記を書て。
曉の岫に出あはん花の雲
笠にぬるゝ名なる阿字の令風　藥師寺岫雲子　範龍
まゝ毎に亭の落やりとづく　辻氏　如元
十日待くまゝ起く春の序あり　巽氏　重澄
四方津田の花にくらぶる那　白江氏　休源
祇下枝に眠るさくらうな
かきこ乃衣々ふも洗濯　白江氏　直家
さくに女寺の妙者これ尼俗姓安住氏のながれ。ぞしいとすさうに
六十あまりにしておかく乃机寺女を訓ゆまふ。ほいとうつくしく。須乃
みちをわりしく。仏乃こちおとたらば。家にまめくしさが。此里
に御ぐしも此尼のあるがちによびむかへ。其字云乃記。家門の記かど

かいてやりつ法乃言をかくらへぞいとゑおれしまふうち浸ぐこて
法乃井筒いつゝ大井の名底を二人詠し詠れしれば　川内大井　女寺　妙善
返し
詠ゑと又金波大井乃水鏡底よんの詠をのこしく
去秋大坂よこく和泉乃人よかくらひしが議通明神に祭ひありとて大
坂乃以樵夫を使ひ堺の蘇鉄売鴻乃うこくを詠め信を森を見て
○葛乃葉や掛よかりの家がつり。　かくて吾孫子庄長井村大
師の園基弘法寺知芳法師の許まかりしよそれ居紫門を法び草
綱乃縄來よ独稱乃閑靜とうそぶき。今なん不立文字乃身となり
て碓坊の日傭とりとなり。趙州乃赤大根を樵雲門乃屎撅とこや
としこく面目を乃新法師に茶話をむつび且暮乃眺いと羨しく景
境又なくあれば西行編乃端よりこれぞ分滴不二の不筆此月ハ樵尾
乃峯に阿字門をひらき。戸月乃笑貌をさしおし。猫窓一滴乃太

茲の日新に法路の御泉をふまへて万字亭に達當乃高を恐を
しかくれ此曉乃眺しまおにしくはなしと眺望此長軸をせしが略ス
　蓄明り寝芭蕉解脱乃秋の菴
葛城や鉢所にはこかゝ月新のそれ曉をとゝ新見つるに
まれあらり黒く乃長何ぐしくれぼし命不望にまかせ松おくの
白紙を墨し。此日智芳師を使ひ明神に行し。岸和田乃武丈に
有間にて契し事此をしが。立なぐら一紙を形見にそれぞ。まゝも餞し
　とらへ来らしこぼれもやせん袖乃露　泉州岸和田　石丸氏　香水
　鼻ひけりとられぬ　宿の　萩垣
右乃ゝ小法路將繪乃ごとくにこゝ汀に帆下松をぞ小物とがめし給
神なれば。沖行水馬もしうら小ては彌棹乃縄をもづとゆへ乃名を松に
おほせしになん。偖御社ハ此森乃うちぞにもこゝ居ハ古人秋の瑞乃

吟もかうしくしく。老木の紅葉木綿錦とかざしは稀穀に啓き適ほど
ぬうづさて　○控捶洲が御舎や殘通し
　これ葉乃いぼこの洲乃水ざりにしるくもゆる乃ほとゝ神
遺世沙法にはあらぬ高嶋。閑院の精舎にて葉たう面。かつり
こゞちに難波乃里に泊るし
○摂津。ゐにし子ノ余　名物や懷紙に蔵る難波菓　三千風
大坂長演氏。ゆゞし義　蛍乃稀に汀砂さいかより　来山
に舎し。仙臺木村一水史　埋れ柴車軸乃里に新さして　西鶴
出発し。予がため小洲　さくら崩せる風の夕雲　益友
無所を時乃一順を記せ。　春しきし無に惜しく酒に咲　輙士
○狩高大坂へ行御の　伽羅より目さまれ繚月乃お　幽院
内。折に来侍れば。冥季お　雷乃ゆもしらぬ鈎篭を捲　仙臺　一水

後一國一所に寄し　雲をまとゆしにて松ひとり秀ヅ　阿波　釣寂
○天滿千原氏霜葩軒乃章句我弟し。狩岡戸の住居を獨張に書しを
○義庫乃雲を筆峯に指さ。大江乃波を硯屏にたゝむ。梅に賊し
芦を吟ぞる。市中乃隠逸子。寒庭義。其性敏達にして氣蒸ひて溫和
なり。昔我ありしてかれ堂籬に祝をなげし。あらやといひて例乃風
無法にそれ乃し此。それは行御坊。それは夜笠。是は猿笠。こなるへざ
らなと戯まし。　○風　宿　干　華　唄　千原霜葩軒　寒庭
○こや章句さしおを　凡ー揚　松後しなく　茅ー　遊ス
漢和一巻せしが略　夕雲雀いづら籠ぬきの春なん
○いつまかくてハ山と　分袂り　○いざ梅質をうきなんひらつゝ
　常少んで柳乃うらん　寒庭
此前巻に記せし勢列山田乃淫義。今又ちに小門東子ちらひし。是

被を守て　○羅波乃梅は夢まゐしてそれ香九宮にてこゝ伊勢れ
演芦は角組よりその波茅里にひゞく。しゝ乃る綿谷氏文昭老佩
子は。海原をかゝるどして樂船にちびれり。囮をつまがざれども塩江の
朝鳥門乃江にすゞてさく。嘴乃多あぎとも。塩能乃吻小めでく。切御
の爲衣啜して。是は法国一見の僧小さくに。しゝ宵一夜の霊鶴をきてう
ちやとあれ　○恩徃ゝ羅波乃梅を宿ともいへ事
餞なくてもはれぐむ　芦火　綿谷氏　文昭
猪飼氏仙房子百草軒。上巳乃詩我和とる一章をのぞまれし
即席を濁し侍りしに又　○三子世界鼎ぬもれまむ衣　仙菴子　可久
余に行脚乃拍拭しまふを　鶯化しそ　大鵬翁
○筆道行　一點圓空を出。一畫陰陽をうつ。茅蒙ゝ文字なら
ぞといふまゝなし。そ力性を天小稟。独り秀達乃傑人となる事乃

いゝしきや。奥に冬籠るてふ梅乃言小。雪を洗ふ芦乃籬に蛍
を挑ぎ。肱柱一机に締し。俛焉主上の太字軒。古橋氏以慶先生
とよばれしまゝ。夢外乃筆むおよびに咲せ。それ香いてゝぬ隈なし。
されば蜜露波瀾の點回には。羅波乃湖馬肝に漂へ。寫翩翩畫乃
蝌斗には武庫乃嵐飛毛に落ち。通岩入木乃蝻には屈説ゆゑ我
手繰麟袂ゝ爲金の珠をいてゞ紀。風書は魚網の綿を奏。蘭亭
乃骨法掌にむめ。義之三筆が手ぶれ撥ゝたるまれ小めでく。
雲勢ゝ輪乃捎ゝのあり説
花我居喰の獅子　蒼水　大坂土橋氏　以慶
○堀内無し古我翁。往古ゝ勇傑乃譽ありて。兵術乃練袖
ありしが。世乃夢なる夏を飼ゝ。自ら緑の屋を下。今なん冬梅の法
小。主ゝ鶯の鰹花我待るんにはあらで。風雅乃脱言を守れし。芦乃

穂さくりして住けるを、予読んに瑞さかみ閑静と長編ちて美し
ぬまで翁も慚愧て一章一詠し、むろひ罹思紙とせざることを半軸を
記さ ○何とろひし、むかしべ乃人のいつるまかれ無好人乃三字を
今現三子翁ハ總角乃始より風月乃才に富ありかしくて拍子より。
其姥ハ墨子とて、えんいぬ白。拍に偏を。西。祇二法師乃跡を懐とし秋
津洲乃くまぐく、山林河海乃嶮をもいとはど、ク年に休て、今ハ紅蓮と嘘 下略

国ひ出よるやうちつりて。友露乃芦亀運に立ありき 大坂ひろ内 無へ
例乃とはとの古がんじと 芦露や首捏ちのうしがらし
こらくやらうく答へし
東ぢ町。虎流菴主ハ予が俗縁乃ちろしさ梵衣うりしが。今は間まて
めぐりあひ、昨乃嘘とて薬師堂よるくほくりしを形見とらくこゝに
かいたく 稽首薬師古佛宮 悲心願海等虚空 温泉洗を
盡衆生垢 時響暮鐘秋色中 大坂苑角軒 虎流艸

いく年此秋長途乃労をとらは、ことするめく、ね雷山素柳主人と俱に
有間にり、わざと葉月十四日おとまお。枚生舎を辞し、望ハ日ハ芥川よほく
あやしき埴生屋あぐくりつつ月乃されくに心野房くわ秋あはれ
なりれぞ。 ○月と雷 鐃がぞくへは あく 田川
芥川や名月 まてく 子乃 いせこ山 素柳

○有間温泉 太本会始乃一滴四大をうるほし。会形に盈を持
つるを性とく入りに禀く氣と一万物に融通をし體を養ふ薬湯を
ことてとゝ松栢獨含をあらはすにほさざて。まる父と四時にうつされ
ちゝくね靈にを崇ふ。雨露父母乃恵下によりてなりいでや温泉此號
然として常。春乃季にかゝふ事も冷陰乃凄然として。秋冬を
發もとうしちれ。たてなうしむ。風やを變化して張中の陽。自然と淳ま
ろぬ。人倫乃濁氣同湿相合ゆへま。おうりろく和合。百病清神よ

かへ〳〵むちゃんぱ山姥湯を商周家神昊といふ。焉心史乃本を。
仍樓羅炎乃な居なんぢ〳〵む奇ろう〳〵ふ藤乃ほみち〳〵ふ風
のわちぐ山の檀湯い和朝乃化身ノ人ぐ法師ノ行基薩ふ神乃お
ほんなふ小まり世揚乃さ〳〵ぬるくかさちぐりたまみれを湯ノ泉
こや浦ふさり。往古舒明。孝徳乃二帝行幸させ〳〵もりこち
つ〳〵ぶ。ま〳〵ぬし濁味ふまゝをたみ〳〵もまいやまさんも。狂地境景
風景翰藏語乃便なり。ふまほは人集こぐれあるう似
翁。おく〳〵困じにう労姫も。いたゝの疝湯ふさ〳〵へらまぶぐろふ。
すくうろれうさんぐ湯込乃いそ〳〵ぢ小湯幕をとりげあぐう垂
檀僕く。木履乃馬我つまぐさうの揚まく乃湯屋女い杓杖をみん
あごま。湯折ふ遙通裸もゝを。猫さ活るうもたゝ〳〵。たういろう軒
をかさう〳〵二階ふ隣。竹離乃秋菊ふ湯女ぐ香ふろうれ。岩

揃乃老菊ま。ゐれ乃濱〳〵ふ飛獅乃掲まを奪ふ。幣湯乃
退屈よい。一飄乃拖女を迂う〳〵。掘炉の茶童を勾引。賞翁の葬を
狗。青紫乃苔の隈陥我伽ぐ〳〵ふ。敲跪みむりいて。便〳〵たう服絨調。
琴深坂の松よい殿〳〵ぢうう三弦をかよう〳〵深ちくろう斧樹神も
ひうつよ呼かゝ。波よかくれぐ〳〵ぢまう。滴滝乃赤判ぢる山懐ふの心乃
雪ちれぬ〳〵ふちう〳〵ぬるう掬乃枝を額ふて〳〵猛九し湯杓をかざ〳〵て
侍も。陥宮我役ぐ。肱枕乃締を念ふ賊ま吟ゐ乃逸人を閉宮の
両をはう〳〵をめうぢうい。あまど模照十方乃金窟い武庫の頂小翁て。
旅客乃卵酒を恨ふ。堅朗三世乃ゐ鬼ふ。地獄苔ふうれふ。有ふ
鞘のそ毛とかう。覚他ひ乃れをう〳〵さゞとぢ足。滴河陶山乃
眠も。二廻目乃岩住。参高遠乃離襦をみまくの加絵さう〳〵み

稲りかつりもあつつまし。下僧も山鼠野暑に神骨をいてこしが
さづらかふうれたる湯奢の栄耀にかほめさ。水搖に縄床をわとれ。
竹亭に観凡をしらぞがれ真如山に四季蓮湯の氣味あるまい
美にぐもしんぞ。旅刹那離散の稲妻に呵らま。須臾生滅の瑠璃に
愧められおつてしく懺悔の心毛を深く驛屋角坊の衣桁法に形し

湯長女の寄りとは菊の枝折すな

「西馬山里まで衣を打絡ね鼠もぬるむ法湯のそふりに
むしろ郎波人なる事あれば文筆敏達の才人。粗氣稟柔和にして。
世紙が絡ぐとしんじ衣にやはしとき有馬川の裾道場川原羽
来師山の麓に閑亭をむすび書物虫となりてうそふさないせし
と入湯の席にとふらひ侍りて見しが月を頼のよりは物あはれなる
を小席して一句いひ捨し　○三乃なや月と書物虫の間冨士

となんいひけれども思ひうつてやまさらん。志侍我形見し
日月両輪挑杖頭　乗風徑至白雲丘　敲成玉韻三千句
蹈遍扶桑六十州　他歳澄心松島月　一床斑坐竹窓秋
主賓相對相忘處　門外潺湲水自流　歳丁卯暮秋

友翰老人特來過訪賦此奉　友雲宗實拜書

○山陽道　去ル貞享元閼逢困敦余来れ六月。大坂を西海に
おもむく。此道記き人乃ひまつく知れし海をなれば。大かた略を
○實揚や淋しさ凝く浪戸乃る　○質のなぐれ衣うけ杯乃諫鼓る
信明の人磨社。別當月照寺矣外堂頭に謁を。門幣屋花蝶子に
細沙を餐大かたならば。祠堂縁記は。古太守源信之君。奇進。大基乃
碑銘。弘文院長編に分明なり。予も海浦眺望乃一軸せしが略

哥塚や夢世乃枝折　杜鵑

○おれ和國寓言乃元祖紫女が。あかし乃うらのかりさ母に韓と
ん我共為夫婦して。和相ハ人乃好なる艶言我ほれ〳〵と書かし。
内鏡にハ般若乃うら悲しぶに。無常露世乃愛のうさ格をしぞ
れりのとかさとぐめし侍。さながら鴻がくれ往還しげさ永氣乃。よ
びかふ春も沖浪に。おづり蒙が嵩の門や。むかへも尾合ねる。
鶴鴿鴻や鏡松や。月我松尾乃うらはまく。弁衣あしに韓を
かざる絵鴻が磯乃ゑのあと。ぬしても尽ぬ物無へに。
紫が竜あしをうばふ堂かな
泳ありしつ。堂なりでも韓が鳴
いさきくや入道乃思子親　月照寺　笑外
とてもやしじ五月雨の閑客枕　社司　花蝶
○ゑ砂乃記と少さく　姥雲乃淄乳やぬる　阿多

○むかへ乃拶接に　ゑ砂松翁。妹背鳳や　詰がわり
簷ゑり風情あり夏苅乃芦　五百藏古西翁　愚入
欲浴りしぞしとてこそさしぶれつ　同
草鞋を加りいれかとくまに
しうら乃恵ゆ信なる　蜀魂　常意軒　道純
尾上の雨鶴鴨くひへし郭云　中須氏　竹友
○柳織小松氏正賢。而望小松乃記をうさて軸にし
和合松乃神代をしへしほとぎに
うらぶるに茂る芦乃浮橋　小松　正賢
余が富王愚入斎寶物に。呉絹元章が他し名硯なり。南源禅祓
乃麋鶴を添られし。予も肝陶乃記をかく略。亦希有乃紫昊芝記
○靈芝章　木に椿あり。草に昊芝あるも。是神仙の園。常世乃
可怜界乃八百屋。仙祐が秘囿に植し雙麟芝六合草を和離にして。

塩梅をかくぬ珍物也。五氣自然味。嘗ていまをのべ。ゆゑに幸福を
まうく。至德あぎて尽くる事なし。おしもおほきに。陰陽相性の地。
ある砂妹背松の産おしくん。室波よりとる玉砂のうへに二本並たり。
天は正質愚入齊に合して。子孫繩とたる駱寶。は陰にあるく光を
かくさんと笑して　○八ノ世の巣立昇芝の森の時ある
は愚入の子息茂之先生も針術の功者也。麋茸の一軸をかく
○鍼術文　非不圓形動くく。天逆刀の御鍼を下し。水火二氣を
うちさぐり。三戈の腹心を融し。を針元を金空の神。細少を心に
しくしたるを虛昇なる物なり。只練磨をこゝろに。天心一致の所を
稟鍼縋下丁機とする事。手よりせど。心よりせど。其我自然の霄。
業衛の風雲に齒源奥に一第三千五百の息阡にかよひ。刹那に
八百十丈の飯道に性還。かつ補瀉温涼。虛實瘦肥を掌握にさとし。

氣療の迅速さ事四時の變を即時にめくらし。合門の良材。大衛
門の中撿にひしたへし。信に湿をうる陰針をもて。瓶をうる雷
邪を破散せ。金水相性の合調よく理氣にかなふ。豫光を見てくは
丸かしらも自句自鍼の一捻に。連座我けがに厚なり面勢を瀉
せし　○早咲や陰邪をくぐく梅の針　たまぬ年冬月陰の杉りかしなれど冬の日なり。
おゝ五月十日ある砂を立。淨ちる乃七堂を辨し。清水山に札うち。自
性院に立ある。即ち山に山の記をかく。は日瀧野の滝川。京又ならひ
なし。星のとれとら纏をもて。獨ぶし乃答に清なくくしいれしを。
瀧川や枝打の鉛浪乃ゑれ
又清花山一葉寺に札うつ。地蔵院に入。余も當山の記を書　略
子規鷲の名根乃ふるあらにむかしを志れふ清花山
○ちくに伊勢乃洞元齊おいせし法　子規猶松明し雲井乃祐

ふかなりて夜吟
くせしゝ略　　あふしおれし面なる　鳴鳩　伊勢ノ　洞元斎

かれ俗にいふ石寶殿さしてもり。本名靜窟。奇異乃異相なり。中ニ
凡匠にはあらじ是ニ神國現ノ證據。和朝第一乃異寶也。神代乃欲に
○大汝少彦名乃將座志都之石室者幾代將經○神宝ハ尚
主婦がり来よ郭ヒ。　いそがぬくれに霄孫乃住連屋。菅原貞
継翁に眉合。出て天神に一啓して旅りをいれり。年来耳技に
そよぐ松我見んと。廣おにすくむ。もや怕抔いまぐ言いれぎり
に翁乃いいく。これなんじ神。おほんじづくし乃纜とはなつ時。試に一
技をさし給ひし異本給に三國宗好乃宮相。折ふし夕立乃迅風吹
通りし即真三吟　○白雨や卯辰の鼈霄孫乃松
此句にて和漢乃　涼　句ノ作　東ノ風　神王　貞継
一巻満しゝ略　雖　夜ノ短　遨　月　同子息　良継

偖しかしられたる翁ハ。金才鉄根にして。文学乃胸窖。著述詩哥
乃心倉。万物せ尽蔵の器量人なるに纏き。和れ見じかさを相と
扇のはられ我かとつ。屋がく余に松乃記とかまと。異ぎて麗ふん地
しく。跕拒つまど。小肱拈て誓うさば。佐盈出合が固果よのがれは
あらじと。例乃太膽者。諾須て。心象乃痛技を搾き。湖をまれし。
謹白。天満神しゝ弓韓あやまるだ。真星我とはぶやさ。瞼をひ
らさ屹也見れば。机も居よげに宮るし
○曾祢松記　山陽播海乃道縁。霄祢津里に鎮理たまふ天満神
聖廟に。おほんまづから植垂たまふ神。鬼樹。獨乃操松あり。是吳相。
大鹿に陰やうはる詩。奇魂涼風我むまんで天香茶ことし。異神
幣象に聚つて。霧月皎てたりなのづから二柱乃相さし。宇宙帝賜
爵乃官禾なれば。なるむ。泰山封禅乃祭壇にまとてる。五大夫を一株

につゝくとも花あさはかなるべし。體木ハ椌にして神倉にひめ。用
材を榑風をよそにして楢乃東拵し鶏磨乃杈掴をひとし。棟ハ四棰よ
まいり欄を二尺あまりにし。柱を五寸あまりに長四尺乃変化を趾ざね
結ぶ。蟠詑をなと結ぶる八紘の風にも翻ひ。鯤鵬の雲をおもふがごとし。
交加乃都鄙賓客を輪して陌をわたり一雨乃すぎて徒も盤桓
て。節蕩の湯のほとりを歩ませて。むろせみ朱離の堺に社稷乃裔貞継
翁。同性良継丈。和光乃面風いと涼しく。利物乃心園を温に寛直
至誠乃ひかりやぶしまろびころに清徳をひきうけて慈悲を容する良樹に
清艶をうけ浅陰錦波乃ふびこにかゝりて。さ堂女略入道も捷
蹊法意乃むつ。祀寶拍と氣稟は積をたりかれと膝杖を並ぬ膝繕を
やぶらずとりつゝまらし。下愚が長途を娼く長扇乃席路をそろふ
弟も世一乃松に繩よすがして玄法乃ちから貫し。是や龍虎乃来れ

穂捨ひし夷者乃まさきなれば。祢を大岡にとゝへ。寂壮丸によそとりて。
ねかりや世一。二葉の要蔭かいふりや胸高くまに居く咲ラ

又月あけし藻かの露や庭乃松

「天満神代をゆたへて禰振なさりしき松風のをる

貞享元皋央　尺鵑堂三千風敬首

○寄椿木菴三千風雅袍行脚　播陽曽祢菅原氏貞継稿
于茲呑空袍袖何國雖有陸奥松島几藤肱一日吐三千句
科毛先生足疾行城於電句健抗於鬼尖入舌奈龝使繹迦
鑵句落地獄耳其資教八紘名医蹈草鞋幅佐者鄙活于六
六州遊諸寺諸社迟東行西行折違啻非陳説處處遊士逸
人或良將或下種或角力張里或濁貿翁伯或邊鄙吏不選
曲奴白者片破等同氣逆氣為友伴耳請古城東京雜林蒙

古國李鬼奴撫容止謦諧謔迄遣曲瓢吟無儥等嗜之祐或
時寓予之亭豈非有陂池華幸乎漸鏟饗胙餘飧勸糗饗去
共自負天下無雙膝行松當腳鳳首麟睛其外文茵絨夜物
迄何所不足乎剩臨出松記牡丹園記或綴和漢合鵬與鷄
又不笑乎客實謂予曰何吟詞迂狂句不酬吾哉不遑否云爾
木瓜化於卵十旬。複躭袈裟。覺文茵。艤霓任颿
撮毫筑。誹海爲揎成涉人

○ 喚折句客名

○賞既沙門初渡御 ○三遲不參幾饗饋 ○千人所引石
輕鞴 ○風流大儀咲壹文

菅原氏良繼艸

○五月十八日姫路 ○天性乃鎰五月雨や葉ぞり
醫師乃記とりさ
て吟せし

啜茶暫聞鵑

姫路高橋氏 素伯

○廿日宮津江乃欄上
に舩乃往來を見たく

○蟬なく軒端乃宮や風月の津
郭に日和まてる旅僧

室野本氏 氏孝

○明神にまふてし京風
世双乃地胞望乃
記をしるく

○ゆびざきやしら羽乃堂水社

「舩人乃いづさいるさを行まじや宮の神風まぢにゆらむ

○涼風一匕宮れ堂ハ暑をさめ
白雨をさけとくるに吟詠

醫師 流閑

○廿二日竜野法雲寺に
入しかさうの事侍て
町屋に一宿せしかし

○清水涼しをのつから見三千風

佳侶 雙吟

秀穎宮乃蟬双吟なし

○廿四日彼前世山繁昌
乃城下誹の宗匠に
法く

○ならひ日ど賓客暑氣に敬氣ら

岡山誹林 定直

○瓶井山如流密衲ありそ
初まくちをうしまに
連元使ひて一日與
りまうしに

一夜乃宮れほうか目ざ面し

○排圖乃枝打奥あるに堂ハ那
笠我帆ハ何ぞ暑を語に見て

法印 如流

○園亭乃挨拶ナリ

○氣味ハ元ヨリ薄生夏ハ浅理むれ
啄ふほうれり　霧乃　容　蕃主齊藤　晩翠

○韓枝乃　螢　闌ナリさえづまり　川崎氏　進歩

今日しも侍中吉侍乃中山ハ見えて来ぬいとけちくなんとまし。右
備津彦社。いとかうぐしく細谷川。有木乃別所。かの劔を捧し所をかんて
くちぬ名乃ほうほ吹てふ山法よそのおもうげのくふりろうる

○板倉橋。二里乃里をなが
免。倉敷村より三里を座ぬ
なれば記をりさくなるに服
して寒ふみちくりしク略

○吉倉山　涼吹ほけつ　蘿鉄人
備中倉敷　更組

○蘿鉄乃めいぼく篇句やうみどり
又思山よ海。人とよ鯖。一帆とあまて素合乃神にとふ熊山乃古城。児嶋。
菊戸。うき洲乃光。唐琴泊。忠明宵門日比などの句をして。侍後の鞆に着。
左右に紅乃江ゑを　○友紅や横ナリ茂家連理乃江
水無月晴午時櫓軸となるゝは追風竿此鐘にかなひ阿伏兎の釣舟。

盤墨寺乃欠作にのわる。遠景えなるゝず。炉中乾坤を出。清涼男に
生し仏地して古風に吟し　○阿浮曇乃霧や所立て涼風亭
手鳴。尾道。三原。忠海。廣嶋。我右に見えて。名にれふ高嶋に帆竿を
画ふ。やうく游船傳ひにあがり。弥山乃別当多聞坊にたく。寺社
巡礼を。僧に山岡海撫。蘇家目にも笠にも尽きて。ほゞ風縁記圖地略
○風乃塒浮巣乃扉やいたくしほ　○水橋乃あまり涼さになる
同八日六夜帆にあがり。下関を六十里乃海路。雲嶋。姫子。久波。緒
方。大竹。周防。光岡。十八。伊宇。神城。大畑。遠崎。矢内。池浦。上関。
家津。雑志。家住。此所普賢ト云性空上人遊女成見し處也。笠門。久
田。邦木。ツク藻。三田尻。長門。内丸屋崎。東浄嶋。元山。部崎。田浦。
文司。都て上下関乃名。須江灘とて三十五里ゑ。順風ゑにほうせ。中二日
に下関唐津屋の市店に祇乃帆あらしぬ。此家く道乃記を文書より

せしか長篇故略　○暑乃荷柄ゆゑに多板乃をじの開

先ん御目ケかゝん二階の夏海　長久

偖も書赤間關ゆ。日本堂双舞舩乃津なれば。住還乃旅人。榮耀

過奢とはくもまして浦山乃風光。名になすびく和布刈乃社常

世を負し亀山乃神宮。浦の常塩漱。ちやとも乃浦。芝浦。赤野に柳

浦。みがきたてゝる玉鳴まで。目をおどろかしたる也。舸に竿さし

てむかひ乃岸。文司開。硯きる岬より。和布刈乃鳴神に一揖し。

神秘なるときゝて。○此うゝ乃和布かりとりしや小蒼黨

かくて旅舎乃隠居。宗意禪門を倡ひ。西に山なさ筋乃濱の名

乃我拾ひ。我檀原の浪留よりあらはれ神し。神乃本宮にまうづ

ゆゑ。いと古人ゝる清社。奉納乃一軸に。○涼風植しあるぞ神社のもとつを

此社に奇異乃付物あり。中にも宗祇法師。古名哲乃短冊を百

枚奇進せらまし。希代乃重寶なり。此神職みどり袂。季實家。

古来まれなる霜眉ちりやふり。歌連にあやしく。韓乃名はこう

はくし。弟にも投狭乃秀作し給ふ

世に自ふ韓林の言ひ蒙ゝかさゝめがたし文学の開ゆる　長門住吉社官吏部賀田氏　季實

○分袂あはくしくれ。例乃くせをのれ自ふくみ言を

○白雨乃通り判あり文司ノ閲。

此翁は七十六歳。たゞひ乃涙を多ひ。ことくなくなられし。又乃目をのく

袖ひさあひて。かの平氏入水のむかしをなんとて。松尾山阿弥陀寺にまゐ

でし。うとも墨乃松のひまより見まゐ。筆海文鳴畫軸をのべ。彩雲彫

宗仙閣を見る。やこゝまゝにむとさて。安德帝御影堂。まゝごいりあるを

おほん像。ゑ御供奉乃一門かぎり乃すがたを。古法眼が筆にとゞめて

まむかしを今乃あはれさ。涙をはらにとゞめかたし。後山乃麓にはをのく

白玉乃碑銘苔をうづき。ゑ小菓に眉を並し。陀羅をゑ向し。かつ豊臣

殿下乃艨艟。日和塩合我待ちまふつきくに。法大名におせごとあり
て。自流自筆此百首の短尺待し。住侶むしとかたり給ふに締しと。心
利乃網和。滑雲。搗布乃看に醴石盞とりちらし。住僧聖ゑく眺
望の表我あぎて。ひらにとさらいたまふやがらく二丈給に狂言せ。記略
●文御新にむかひよしや君
かくうきる世にかくらぬ流
乃新ゑ。ゆゑ乃紫金宮
まれとかつハ名あらしくて
○うきも雲乃松我生せる浮巣ゑ那
○陸にハ涼風境の八百潮ハ平家蟹
浪乃うこの新ハ君が常世にてあらるめハかりの形ゑん歌なり
長府大守君の咫尺をうれぬ。伊藤氏耳海先生に風月乃遊をかいに一軸シテ
○天地ゑ第物乃逆旅。光陰ハ百代乃至客。予もまた獨にかぎらへて
虚無乃和驛に生おし。身をありまぶとしもハ何らざれど。只四時乃
余波に倡ひ東にちり西にはふる。時も四陽笠風に帆して。まぐまぐ
しらぬひ乃堂いざよふかゝ舎。文司乃岡人。耳海硯海菴ハその質五

倫正從乃道楽に。詩歌乃花月だましゐにあてはるに。風席涼簟に
会せしが。呂に移り。律に琢し。扇のあやハ花燕乃袂飄灑。夢のうちハ
貴妃乃唇。可憐。余を尻夢に唱歌せし。控の梟とはぢぎ。竹蘭
の風神にもひをかりせし。流石に離翅乃あるれくと。下略
○此句ともあ吟くに
二巻満しか
○羽我かりせり。風月の浮巣文司乃岡
夏なきあけ九万里の流
下岡伊藤氏
耳海
○黙されぬ咲ほとくぎに耳雫
同
○ゆゑ生もてるへかゝく一章
一軸してしまふ
茂里路之のむ柳乃黄昏
○ひ後く八さみを乃ゑても腹さらにみちぎ。心を天地の和にはそ
ばしめ。虚無をなん養へる。空戯乃風賓なり。寂を無為乃仙翁。かく
る一粟にしぞし舎れるぞあやしきや。かれ釣針とはにもやこし。
赤鯛乃浦の濱庇に。やく膝我いる。梅岡散人と言ものなり。それ筋

とのさたやつのみこ常に修(ウズキ)まめだち臭つくろふ小人(ヲビト)捕兒(とらこ)と云〳〵
ね類(グビ)つやあ〳〵むかく独ごちてやこねこを夏享(ホト)龍乃子(たつのこ)海乾(カキ)亡(ナケ)
さだけ一池(いけ)を雲月乃目(つきのめ)もいとうだ陸奥(みちのく)ふありといふる松浦の壺
さかりひなも吟(ナガ)歩(メ)の模(タカ)欵(ヲキ)よりぐさめ巴江(ハエ)乃はを学(まな)びてや流(ナガ)連(レ)ん
字乃阿諸復乃海ふよを路(ヂ)つ。竿(サホ)代(シロ)にうち駒(ウマ)。一和(ひとわ)そ(せ)乃ん
のなとかく〳〵ぬよそのいく〳〵あくまてかはく〳〵るあてん也下略

大淀三千風外入　仙臺松島老吟身　綿心紋口眺望集　綴(ツヅリナス)就言々合浦珉

又大淀乃まち砂(スナ)つまど三(み)よくの海松(みる)乃多浴松浦かがふちとも

又

○吟(ナガ)客(キヤク)浄(きよ)〳〵つひさかたの嵩雲(たかねの)峯　轟赤間関　耳海

鳥(とり)の亀山八幡宮ハ宇佐(うさ)と石清水(いわしみづ)神(カミ)幸(ユキ)乃祢興掛(ねごしかけ)乃縁起(えんぎ)の。
宮阁赫(カク)〳〵て景眺盤(ケイチョウバン)〳〵たり。記略　○亀乃毛(も)る祢(ね)風や学(まな)がり。

盃盤交錯(サカヅキヲトリカハス)熹酣(タケナハ)時　満座騒人吟贈(ヲクル)詩　標致絶塵清似玉

何妨(ナンゾサマタゲン)莫逆(ムツマジキ)稱(ショウ)相思(スルヲ)

赤間關儒醫玄昌机

○三千風やあ世東(よあづま)千(ち)兒(こ)のく夏乃月　玄昌

玄昌(ゲンシヤウ)　言乃(ことの)ほうれ火

烏兎兩輪忙(リヤウリンイソガシ)往還(ヲウクワン)　片舟丹且(カタブネニカ)繫碧雲東　九州四海吟遊後

蒭(カヅ)識何人(イカナル)不慕風　赤間關無敵

○右漢和とちふ　風雅(フウガ)乃(の)祢(ね)心(こころ)　吉田氏　窓意
いつまとも小序は
返章(ヘンシヤウ)してをくろ　東風(あづまかぜ)やふ(ふく)ま(まこと)さ(さむ)あて　松岡　休意
しく略

いろ〳〵ぬ(ぬの)紙(かみ)こそばの夏(なつ)書(かき)　吉勝

○又家(アルジ)主(ぬし)吉田氏一紙(いつし)をおまて形(かた)ちを乞(こ)○心(こゝろ)ばかりの事(こと)をそこ
へ(え)ちぐさびき蝸牛(かぎう)國乃(の)あ〳〵そひと迹(あと)て。今(いま)やさい南海
乃果(はて)ま(まで)。富士(ふじ)乃大蠅(おほあぶ)と追(おひ)つさ。西極(さいきよく)乃雲(くも)を枕(まくら)とせ一。玄(くろ)牧(まき)
角(すみ)の臥(ふし)沼(ぬま)と跨(またが)ふ。ぐ(ぐ)つ〳〵の名(な)ふ(ふ)り筆(ふで)技(わざ)をもよく。頌(ほめ)さうら海

亀乃めいぼく和布かり乃思のいそぎありさ賓大きさなるべしや
とう喜れなる帆幞乃汗うちはらひもや肘に轄さし抱牧樹より
拴うち天々夏ばしさはしまふまとうらへも素簾巻とて宿屋乃
○お演乃涼風はいさうる我法綿ん様よ　宿吉村氏　長々
　　青蓼　夕ぐれ　盞乃月
となんいひて腰張に形見し。又当取れ繁花ゆへに。楓橋秋泊いと
わらし。遊女時勢粧乃鶴舞妓となれ。禅門を小倡れ場屋何がし
親仁が二階よりて見侍し。此屋にハ戯女十七袖ありて名我跡して十七
句我望也。又圃に艶記とのぞむ。即席に敷氣しまゝ句。
○遊女行文　浮橋元年　鶴鶴歳。二桂神御詞。あなにへや
交合好さざらぬもの。蒔絵乃庫に礫瓦を積るがごとくいとさう
ぐし。されば陽雲父陰山母。自然雨露乃積蓄によりて万れ雑物

と生しまつる道なるべし。かの仮乃舎のそに風に契を帆にあまぎて
白鷺船にぬまで。三味乃青紫我なし。あるハ八葉乃禿お鶴となん
きこしへし。滿干の珠簾とほれめかし。うへこね鶯に寺の坊さ面に
思ひれ金泥乃慕慕ホ。スクワン目に清おされ南方偲鎖殿乃お内儀
とぬしらあしあれば。されど。棄魂鬼といひくらんも。かつて邪正一ふくの
吸法を風味ある事とおらぬ歸敬にやあらむ。さりとて大沈に
きよやさてさやうに思ひれんハみれくお山の夕時面肖良ないやなんと
○月や落乃おてきさ乃夕ぐれをんなへし
時　織女久ひ待を月　師直執筆右田艶好弟子密風書
貞享元年六月廿一日豊前小倉宗匠賣炭より入
暑我さくぐ柳が浦を投れこう那
　　けらし清夜も浪乃濁江　豊前小倉　賣炭

○又挨拶すり　宿うまし御稜乃世界三千句　賣炭

山夏氣すり笠縫新し

やがて連花伴ひ。金糠長濱にて浦まで乃小貝拾ひん少ありしが
こゝに食明し乃濱がぎし乃ふ志極山。笠ぬひ浦まと乃海眺絵に
よく似たりぞこに陰の園なる樹木乃下よぶしこ人とのぞむ

本陰乃夕へ雷嶺だつまき夏樹

○それ夜眞切に庵乃くしきと　松花に別志夜狂ぐ人むれたり

鄙宣乃蟬　松千書をいれ　芝ゝ小倉　道之

○夷乃祝りて素秋僧しの金に　粹乃夷。生て涼風り人我絢

あら和布扉乃たてむ雲　福性院　素秋

○能序よひとり敗り　堤を沈葉しまふ人はいひし　堰釘を鬚り巣かゝる句老に

○明年乃夜又山里なり　夜曇にせられめや。鄙乃里うれ唐鳶　素秋

はくきれしきまゝに　あたり記しぬ　夜極楽乃風とほとゝきは　三原氏　重政

同六月廿五日小倉我立。即非和尚開基廣寒山を見たく大橋に
はく　名称を極て面に咲せり宿乃夜　芝ゝ大橋　苅田氏　殘春

耳ひく泉り立と思りつき

陰奥乃ちかれたゝにもしらぬひのはくし乃海よりとぞよせ　殘春紀文　無染翁

ちかれ浦ちかれよなれてしらぬひ乃蓮堂に海にかゝるやなぎさん

○隣在宮市浦氏を山好きなりし庵乃記とかきし　記略涼しき風情　蓮山我常て魚雲に入目後富り　宮市芝ゝ風軒　柳浦

涼袖まれにあまぎの夕雲

秋風乃岡とゝ西切り　夏衣　同

百日ぐ後め乃蟬の編綴

同廿九日彦山にのぼる。宿坊龍石坊にはくさてく目を驚す大岸
麓より二里のぼりて八峯十谷に寺社乃拜所百余基。房数三百余

宇俗家七百軒、舊跡乃名所二百余ケ所。是より上中下宮并ニ甫
院ぶ山まで、嶮難五十町。神道修験習合乃山ニ而本寺は
代々座主住持職なり。境内圖しるく懐中せしが果しなければ略ス
○彦山眺文　下宗實相乃峯よりは、役なにし乃金風氣候よからひ
三諦相即乃洞よりは、律義をみちて玉浪一葉秡かづねごく地みちよもり
かれを佛乃不変體、あれを神乃随縁用。吾ら文風水乃遍泰迸
殊同空のそ獨ありとほこへ、新しき滅他忘性ね草鞋を貴杖と
歩めとするいでや、当山乃初開ニ崇神帝勅宣として天彦根神
還住ゆ水晶石よ鎮ませしより、是嶽を彦山といひつたふ。忍辱の
験跡を慕ひ、空是風衣の金剛乎。役仙角、胎金二峯をくちめ給ふ
世讃ていふべたまふる事、やまゝしかも猶とゞまりをとまさぐり
禅頂よ至る法女俗乃三十體宮は空假中乃本律家ことかんぐしく

古人もあり。神離よむくひえ氣を離れて、賢木ゆつまのこ宮ぶは深染と百
枝杌乃瑞よたいまつり。散齋致齋乃相ゑとうち、清淨圓滿乃法
楼正直利世の神恵不圖胸乃悬想よてらへ八百社の遥拜し二十世
乃かざりうちあげをしがばづゝや汗は裏りてそぞろさむあくぞ
なきぬ旦ひよ横乃常界に到りし思ひをばさんは峯よ峯とかさね
しぐこは阿遅に加摩羅乃一仙菴乃ぐりありしや雲をも乃苔伏し
ろよ臀をへ膝駒といふべき。回顧黙然として群眺たるはかるし。一に
三乃神嵩はいともかしこし。至間頂相乃如来地妙法會乃名よある
鷲巣乃峯は鼎乃ごとく、雲よりすゝみ辟天を居られそみちえん獨
嶺頗梨の二棹とまもり。忉利天界もかくやあらむ。下界の凡心は
くちぬ呼乃嘗の窟を夕梵をとゝゑ、吃夜乃さゞれ滝を鈴乙女乃
時のなそうつゝ衣え裏乃玉居に石。嵐ふぞすむ貝吹、松翔雲喜雨の

化女相たゝく。白鷺も誰に御し。宇佐の神託あなかくしは此神華
まはらうむべくしられ。かれ花月童子飛渡し鏡石。見なん信に
人我憍慢乃新をうつまはらせまやと。かつまゝにしまゝ。まゝ
あや松主菩薩お坊乃行基窟に行。三麿乃僻心我こゝし。花月乃
世華をうらひ。狗賓の蓋をそやぶらしぐ。樋にやまらひ谷に
乃ひらの松舎生籬をならべ樓閣基我つゝ。ひたり。酒掃坊士凡
延強力ほとへ新しく。袖をり性還もおりし。都にて高山遠光雲衢
海嶠も無念乃師。山鳥溪花も世心乃朋。おなたふとや。今日の
神仏心念塵に踏るなまなしと。○彦の嶽やそなる紀風もそれ秋。
光乃ひうき世の蓋乃曙に滿よひ乃ゆゑは攀にぞ見る
○宿院龜石坊一羽亭の庭は。雪舟の作。即興の一紙
愛ぜざる所より見れば。物と吾也と見られ友なし。只虛無乃真人

を師範とせられて。乾竺坤韃にまらせ光陰を粮とし。雪乃曙波の
夕ぐれ。鳥に案内をさせ。兎に舍我かゝむ。幸は山此菴泉は。新為
乃用道者。雪舟和者乃手ばさ。山虎泉流乃形相をたゝえをりまし。
主雖れ乃めいぼくと自負し給ふ。我に艶糖又二なし。ぐれとかの
雪翁を。益土得富が跡を追ひ。元章先生ぞ手燭をんとし。かつ天
性通肺乃道滅しなれば。箇に緣生乃水木に同氣し。朝には雲門乃
燒餅に後我肥し。夕には趙州の赤大根の辛にて眉をしらめ。三
年は菴乃拍樹下に被をかぶらまし。いとうらやましうなし

古来交なし。雪舟かゝるん乃籞風
先庭を發つり 彈 時雨打 主亀石坊 一羽軒
○初秋乃富我 とゝらひて 萩乃朝とに鶴 風衣 袷をとり
露なれむし 絡 槌を 箒を 俊覺坊 言緣

○老お坊乃　光盛よそく　○神通坊阿字乃一葉やかめし亟

○行ひし梅丸郷よかし　あくかつ濡呼にあや　○法心ゆくうぞ。篤と一葉ハ五ちなかり

しかるもしかるひま　向巻のうへりて　いやさやうまくハかきな乃初秋　老お猪膝村　梅丸

○又あいさつし　○さやうきく風乃風上重我ふく　同

○多秋とれし　あくハ大指村を使ひ　又三月かくひつるね　○再会や星乃笑ひんう弁乃秋　亀石坊　一羽

松ゆいふ字我心葉の多

○七夕乃和　麻衣星ゆかしこふぞ長旅して

老山へ出ぬ我ゆや神路乃月　宮市島氏　重政

月桐十二月笠ぬひ鳴乃急。櫻葉乃天神ふしおと。中津の城下に

一宿して。宇佐小崎氏水滴幣軒よそく。又の日やがて至先達よ

て。蓮華乃弥山。御本山。六十丁乃御坂とのぼり。六房乃中石

垣房よ立寄。庵泉に汗衣そくぎ。信よ縁樹雲ゆ植清滝旁乃

上ゆ落ふ。遠眺無双乃頂上。弥暑乃汗も出ぬぐらり乃本法り。

石體檜現とそく秘室戸あり。名所かぎく奇怪乃事ども尽し

がたし。眺望乃記略　○金風乃心の柱や御本山

一和あるし下ふしそ。当所の人といざるひ。云ゑぐらす。

○宇佐境内　凡日本第二乃殊勝地。四面左山乃かくろひ。其

内ゆ亀形の森山。ゑんぐりハ菱形池。月瀬川。浅瀬川。寄藻川をおび

て。中嶋となり。現乃蓬莱山といふべしや。惣名菱形。亀山。又小金山

といへり。第一應神天皇。第二神功皇后。第三玉依姫。以上三所。南

向。和ゆ八ケ社我始として。云量乃末社あり。社頭乃茅葉ハさく

也。廻廊乃石をぶら冷と静ことして。只虫がふりぬる能乃あり。水れ

たらぬる鼓の音。松ゆ言ふ左諄辞よ毛もいよぶちて宿古たり。七

堂伽藍の刹廢ひ所しく磔礩よ雲ひとりしてたるもかつまつき

くし。社僧四十房。寺大宮司をはじめ社家三百余宇。其外も吏
乃多き事。八十余ケ所也。当社祠神秘不思議。古今奇瑞すくなからず
或縁起。仙居亀山八幡宮乃記にあまりたるゆゑ爰に略。只なんぞしみ
ねさとく。三乃所に於。山より白一　○山をさぬ不動亀の峯とく神姿

月乃瀬の川淀に影をやうつすらん神乃心ハ雲ふかくとも

御裳濯川あさたハ人乃心ならぬ哉月もかゝりて

寄藻はからびかくれの鱗をも生るを放つ神代をや志る

ひろきこの池乃心ふかくまことてすみちがひのもやどる月影

○ある社日連歌ハ
当所にて第三
まてとのそゆれ
よ志くねたる

○鱗や月乃うつるは御裳濯川

岸乃柳の名こぼを秋

松ひとつまことにのこれ雲晴て

○夕くれハけし花乃
みゆとのそまれて

○朝白や夕へまで見ゆ月咲ける

千里一景乃文或見たる宮　宇佐永松氏　盛昌

風ほなく宮ハ芭蕉のうらはに　宿小野　水滴

寶蓮院。喜多院乃風情いふもおろかなり。盆乃うちわんとあらす小屋
そろひ。福縁ハ見とくもし。又中津の宮ふかくりしさ桜楼よ

とまりつまし一景ハ柳乃うけ法師　中津宿藤氏　春味

○此中津ハ蟹花乃
池といひ。いづまも風
月乃方人のきよそ
なるくとかきりし
まことにげる乃眼を
そへ三軸法くかきを
よろきことをさはりし
が略

菰薦乃ほのまき只秋の風　同氏　竿水

瀞錦図きおひさりまて聖花せり　紙谷氏　重玄

一夜現容夢露ざれく別たり　三輪氏　我酔

松浦乃月とより来や耳乃枝　糠谷　嵩峯

月きりて気か余ゆく松浦や　

○最お乃記とうきて

○蘭花や露も焦さる夕化粧

り月乃朱抜けよひ継　菊氏　宗朝

大貞乃八幡大宮司敕馬乃宅まて杜乃記をかく。大宰まひかた
の池の蓴まて神姿なれはくるゝ神秘とさして
神新なる月をとゞめし蓴さはり
「前代乃根ざしを池乃心なりて蓴ハ仮の神をぐらふ
「蓋形のいまるなれ敷つ水の面に月さへうごく新のさやをき
○葉月廿二日耆闍崛山羅漢寺に詣言ひ心滅乃窟境なり。默
して心鏡にうつせば。ぢらに蒙みに逍遙して。胸裏三千乃界
めぐり。刹那にみちぬ。石體五百羅漢をさらす也。石地蔵千神の窟
本堂客殿皆窟乃中也。開山は曹洞宗圓龕禅師。亦逆流仙翁
廟にしてちからを合せ。石佛三千七百神一軸乃うちに刻まひし
妙工なり。香霧金風乃変化なり。天蒙氣を深おして異窟乃扉
におほひ地には白塩を湧して。飛龍古松を彩る。當山十二境にす

ぐり五尋一軸をかさしが略ス ○山山乃五百枝の一葉やらうん章
「寂寞乃窟にすめる羅漢寺ハ是ぞ塊卒乃面門番
現住竜山堂頭余波れしを語ひ詩餞したまふ
千里觀光遊海國 芒鞋竹杖扣岩房 俄然揖別柴門外
更覺脚頭雲水長 豊前羅山苾蒭 龍山艸具
○廿六日豊後日田
豆田町に一宿して
霧を吐やされとくへし月語る
盲心夢をれて蒙寝肥なり 豆田町島氏 松國
○雖ぬくをりくて
生田乃大滝をなるめ肥
後の家に火の気れ記を
かさ又宿まく
萩乃宿月も独光乃ひぐきふ
心ぞせ我の霧の夕くれ 宮原奴留湯氏 吉左
○漸く八月朔日阿蘇の
宮乃地町にはくる。
大きなるね独光なり
餘むしや稀に此餘勢情ぶり
おかしの月なり 薄庭なく 阿蘇宿 正貞
偖宮めぐりし。天地二息の拜揖して。當社ハ景行天皇御鞠の時。阿

蘇津彦ノ媛ノ夫婦乃神をまつりしとも也。一説建盤竜命。尊部吉
見神國造速瓶玉命。是當大宮司祖神也　以上三座末社七十二所。社家廿一宇
阿蘇よりして月乃供助とハ記せしとも也

○阿蘇煙景

御嶽乃煙穴見んとせし遙に来てり。二里乃嶝路
をのぼる。嶝より清僧行者流三十七房を絡山本院七堂の伽藍
山岩乎が寺。開山月支人最陽禅師と云。彼乃時ニ本ここにそて
頂より煙洞三池あり。廣さ百間ばかり口ニ廣三百弱池の温泉
涌りへるるくして青黄赤乃三池なり。煙ハ穴より立のぼりてそのひびき彭
雷乃ごとし。煙三里遠方よりも見ゆ。その冷しさ事二鬨ましとよ
むらに泥岸をまろろ小黒く卵乃色あり。が丹富士見西行の思ひを
のべられしも。かれどもいあらじ。山に根砂をまさ。温湯煙山と抄よ
む。群嶺黄香ふはりまり。纏枕るといふも煙嵐ふくる事なかれ。

ともかりみるに燐火鼻醬を搖まて事化物乃一翳に驚動する。
あまつををみるぞ。只ハ神扉をひらひて遊魂の嵐にはらへぞなり。
止止の心柱乃毫小斗よ離れかへ轄の利剣をひつさげてうい
くるかハみてとしが。心外乃脛をあめそ白雲乃孤飛うてやまで
もあらぬ。うし大空乃一輪も又空にとでまましくぞとく例の禅
咄り下ぬ。とや是のさめくれろ。文章よへるかろたらず。未穏ひき
よ我心眼乃風光乎しく鼾よやうく搖つが川腰中乃瞤。文
かるふ不能容のんとも

「風よ手びく梛もたちるを西行しぞその人がらの伊よろ
「何ぞ乃嶽をもえぬ煙ハ立ぞこ乃みたぬひの枝おなるる

目ハ行脚文集巻第三